

ワークライフバランスは 自分の価値観で決める

小林 里実

聖母病院皮膚科部長

ワークライフバランスは、各個人が自分の価値観で自由に決めるべきものである。昨今の働き方改革による個人の時間の使い方に対する制限であるが、一律に強制となると不名誉で残念な制度といわざるをえない。その目的に「働く方の置かれた個々の事情に応じ、多様な働き方を選択できる社会を実現し……」とあるので、自分の時間を自由に使いこなすというあたり前の自由を奪わないでいただきたいものである。新制度発足のきっかけは複数の過労死事件であるが、体力には個人差や年齢差もあり、仕事が趣味という医師もいらっしゃるため自己管理のもと、余暇の時間も収入が得られる形式を維持したまま自由意志で仕事に従事していただきたいと思う。たとえば、各病院に管理士を置き、継続的な超過勤務の医師と所属長にアドバイスするなど、個人差に対応できる制度がよいだろう。そもそも、子育て中の医師には帰宅後もさまざまな業務が待っているし、家庭内介護を任された主婦は毎日当直である。

ワークライフバランスの調整は、結婚、子ども、介護すべき親の存在と兄弟姉妹の数など、置かれた状況で大きく異なってくる。たとえば子どもがいる場合、親や配偶者のサポートが得られるか否かでワークライフバランスの悩みはまったく異なるであろうし、家族のサポートが得られない場合は第三者機関を利用する経済力があるか否かでワークの部分进行调整することになる。

さて、私の場合はというと、配偶者や両親に子育てのサポートを求められる状況ではなかったので早々に自分で行くと覚悟を決め、両親が同時に倒れ数年で逝去したが、(自分は知らされていなかったが) 介護の費用を出す形で兄弟姉妹とシェアした、という状況であった。その中で、ワークライフバランスは優先順位をつけて考えることにした。20年後の自分に



として何が大切か、何を失ったら悲しいか、を考えたのである。その結果、①子どもたちとの関わり方と教育、②ライフワークとしての仕事、③自分の楽しみと健康、と序列することができ、それらが満足のいくレベルに充実させられるかを指標に調節してきた。それには、時間の割り振りより、経済的要件が大きな判断要素になった。収入と仕事内容と時間の3つを天秤にかけて調整してきたのである。私が大学を離れた理由は収入である。研究も大好きだったので、②については大学勤務医の仕事は楽しかったが、とにかく低賃金で、自分が満足できるような生活が成り立たなかった。国立大学の先生方には理解できないであろうが、何より①の子どもの教育費を支払えないとなると、身勝手に②を追っていて自分の望む将来に到達するわけがない、と考えた。ちょうど、次々に発生する問題から大学にいても研究の時間を確保できない状況となり、せめて臨床研究は行えるかもしれないアルバイトをしなくても①が賄えると考え、市中病院を志願した。大学や大学病院のために費やしていた時間は、掌蹠膿疱症の啓発や他科連携、患者会設立などに使うように変化した。

いま、子育ても教育の最終局面に入りつつあり、今年からようやく③の準備を始めた。②もやり残したことが山積しており、優先順位は変わらないが、各々のウエイトが変化しつつある。